

2021年度
情報化社会の教育

(第50集)

も く じ

I はじめに..... 2

II 教育実践

 1 教育課程編成にあたっての基本的な考え..... 3

 2 第71次教育研究愛知県集会の動向..... 3

 3 教育課程編成研究の実践報告..... 5

III おわりに..... 9

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員 情報化社会の教育部会

2021年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏 名	単 組	分会名	氏 名	単 組	分会名	氏 名	単 組	分会名
稲葉敦志	名古屋	しまだ小	加藤隼也	春日井	出川小	夏目照久	新 城	新城中
大島創平	名古屋	大和小	岩田智文	尾 北	(江南)西部中	清水智史	豊 橋	本郷中

第67次～第71次教育研究全国集会リポート提出者 (◎部長 ○副部長)

第67次			第68次			第69次			第71次		
氏 名	単 組	分会名	氏 名	単 組	分会名	氏 名	単 組	分会名	氏 名	単 組	分会名
◎鈴木優太	尾 北	大口西小	○小塚俊佑	稲 沢	稲沢東小	○石本敢大	名古屋	桶狭間小	太田 甚	名古屋	道德小

I はじめに

情報社会に生きる子どもたちは、無数にある情報から必要な情報を収集・選択し、整理・分析する力や、自ら情報を発信し、他者とのコミュニケーションを深める力が求められている。本部会はこれまで、教科の枠にとらわれず、情報活用能力を育てることを追究してきた。

近年、子どもたちは学校や家庭の中で、必要な情報を選択して収集・整理することや、自ら情報を発信し、他者とコミュニケーションを深めることなどを通して、情報活用能力を身につけている。その一方で、多くの子どもたちがインターネット、SNSなどの誤った使い方により、トラブルに巻き込まれている。これらの問題を解決していくために、子どもたちがより確かな情報活用能力を身につけることが必要とされている。子どもたちが、情報メディアを主体的に活用する力を高めることや情報を批判的にとらえ、正しく有効に活用したり、発信する情報に責任をもったりするような情報モラルを身につけること、論理的・創造的に考え、課題を解決していく力を培うことが重要であると考えます。

同時に、教科・領域の目標を達成するために、われわれ教員にはICTを有効に活用してわかりやすい授業を行う力も求められている。わかりやすく、学習効果を高める授業を行うために、ICTをどう活用したらよいかについても考えていく必要がある。また、プログラミング教育の実施に伴い、論理的思考力や創造性、問題解決能力を育むための手だてについても追究していく必要がある。

情報社会の抱える課題は山積しているが、子どもたちは、それらに向き合い、克服していかなければならない。そのためにもわれわれ教員は、子どもの学ぶ意欲を高め、わかりやすい授業の展開を行うことを教育課程編成の基本的な考え方として、これからも追究していく。

めざす子ども像 ～ 情報活用能力育成のために ～

		情報活用の実践力	情報の科学的な理解	情報社会に参画する態度
小学校	低学年	情報メディアを活用し、自分で感じたことを発表する。	情報メディアにふれ、体験活動を通じてその活用方法を知る。	情報を発信する際のマナーやルールを身につける。
	中学年	情報メディアを活用し、自分の調べたいことについて情報を収集・整理して、発信する。	さまざまな情報メディアの活用方法を、体験活動を通じて身につける。	情報メディアを活用して人とふれあい、情報の受け手を意識する態度を身につける。
	高学年	課題や目的に応じて必要な情報を収集・整理し、受け手にわかりやすく情報を発信する。	さまざまな情報メディアの特性について理解し、適切に活用する。	情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、情報を批判的に読み解く力を身につける。
中学校		情報メディアの特性を理解した上で、目的に応じた活用方法を選択して自らの課題を解決する。	情報の分析や選択・整理を行い、自らの情報活用を評価・改善する。	情報発信に伴う責任について理解し、社会の一員として情報社会に参画する態度を身につける。

また、情報活用の実践力については、次のように考えている。

	段 階	内 容
の 情 報 活 用 実 践 力	情報の収集	情報メディアを活用し、問題解決のために必要な情報を収集する。
	情報の選択	収集した情報の真偽や価値を判断し、必要な情報を選択する。
	情報の整理・分析	選択した情報に、新たな情報や自分の意見などを加え、整理・分析する。
	情報の発信	整理した情報を、受け手を意識してわかりやすく発信する。

II 教育実践

1 教育課程編成にあたっての基本的な考え

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」について

情報社会に生きる子どもたちは、無数にある情報から必要な情報を選択し整理する能力や、自ら情報を発信し他とのコミュニケーションを深める能力が求められている。そこで本部会では、以下の4点を基礎・基本と考え、追究したい。

- ・ ICTの基本的な操作を行う力
- ・ 目的に応じてさまざまな情報を適切に収集、選択、整理・分析、発信する力
- ・ 情報モラルの必要性や情報に対する責任について考える力
- ・ プログラミング的思考に基づき、物事を順序立てて考え、問題を解決する力

○「生きる力」をのぼすための重点

身近にあるメディアから情報は途切れることなく流れてくる。その情報に惑わされてしまう子どもたちも多い。情報活用能力を確かなものにするために、情報を主体的、批判的に活用する力をのぼすことが必要である。また、著作権や個人情報の保護、情報の適切で安全な取り扱い方や情報モラルなどを身につけることで、情報社会において、豊かなコミュニケーション能力をのぼしたい。

2 第71次教育研究愛知県集会の動向

(1) プログラミング教育を含む論理的な思考を育成する実践報告

- ① 名古屋のA小分会からはタブレットを活用した学び合い。共有した情報を話し合う実践が報告された。

自分で判断しながら問題を解決することができる児童の育成を研究題目とし、タブレット端末を用いて情報の収集、整理を行った。思考ツールを用いたワークシートでの共有を行うことで子どもたちが自分と異なる思考にも目を向け、自分で判断しながら問題の解決に取り組むことができた。

- ② 一宮のB小分会からは、プログラミング的思考の「分解」を意識した授業の実践が報告された。

ビジュアルプログラミングの授業における分解とアンプラグドプログラミングの授業における分解を行い、どんな動きがあるかを知ることで見通しをもたせることができたり、周りの児童の動きを見て、足りない動きに気付いたりすることができるようになった。

- ③ 海部のC小分会では、対話し、試行錯誤し、仲間とともにプログラミング教育に取り組む実践が報告された。

カードを用いたアンプラグドプログラミングからロボットを用いたプログラミング教育まで、小学校での成長段階に応じた活動を行い、児童の関心・意欲が高まり、同時に論理的思考力も高めることができた。

- ④ 刈谷のD小分会からは、プログラミング的思考を用いてつながりのある文章を書く児童の育成の実践が報告された。

アンプラグド方式を用いた国語の授業を行い、カードに一文一文を分けて書き、それを並び替えながら、文章を書くためのフローチャートを作成することで、文章の順序の大切さに気付くことができた。

- ⑤ 豊田のE小分会からは、特別支援学級でのプログラミング教育を通して生活力を高める実践が報告された。

ルビィのぼうげんを用いて、パターンとアルゴリズムについて学び、カードやスクラッチを用いて

おもちゃを片付けるフローチャートを作成し、客観的に自分の行動パターンを分析、構築することができ、自分の生活の質を高める手だてとすることができた。

⑥ 質疑応答の概要と助言者のご助言

討論では、プログラミング的思考の分岐の考えを用いるタイミングについてや、タブレットとアンプラグドとをどのように組み合わせて指導するかなどについて意見交換が行われた。

助言者からは、プログラミング教育の継続的で発展的(スパイラル)な実践によってプログラミング的思考を高次に育てることができ、そのための手だてとして ICT を位置付ける必要があると助言をいただいた。

(2) 子どもたちの情報モラルを育成のために、どのような学習活動をすすめていけばよいか

① 名古屋の F 小分会からは、インターネット接続機器のよき使い手となり、効果的に学習に活用できる児童の育成の実践が報告された。

情報モラルとデジタルシティズンシップを融合させた教育を行い、インターネット接続機器の正負両面に目を向けさせることで、児童自らが正しい活用方法を身につけることができた。また、単元内自由進度や個別最適な学びと協働的な学びを組み合わせた授業展開では、児童自ら教科書や機器を効果的にいかし、学びを深めることができた。

② 稲沢の G 小分会からは、タブレット PC 活用に関わる発達段階に応じた情報モラル教育の実践が報告された。

児童の実態を把握し、保護者・家庭と連携した情報モラル教育を行うことで、児童だけでなく保護者にも情報モラルやセキュリティの大切さを再認識することにつながった。そして、家庭での指導の必要性、学校と家庭での連携を考えるきっかけにもなった。

③ 豊橋の H 中分会からは、情報モラルを身につけることで SNS の望ましい使い方ができる生徒の育成についての実践が報告された。

SNS の問題点を捉える事例の提示や SNS の望ましい使い方を見出す話し合い活動を行い、実際のトラブルの事例なども交えることで、情報モラルが向上し、家庭での SNS の扱い方の見直しにつなげることができた。

④ 岡崎の I 中分会からは、NHK for school を活用した、SNS 上でのコミュニケーションを考える実践が報告された。

いじめノックアウトの SNS の回を分けて視聴し、デジタルワークシートを用いて、小グループで話し合いを行った。考えを可視化して立場の違う生徒と話し合い、その後ホワイトボードで学級での話し合いを行うことで、SNS における適切な言葉遣いについて自分の考えをもつことができた。

⑤ 岡崎の J 中分会からは、タブレット端末を用いたおすすめの本の紹介をする実践が報告された。

誰にどのような本を紹介するかを自分で選び、詳しく取材する機会を設け、スクールタクトと Pages を用いて原稿を作成した。タブレット端末を用いて撮影編集を行うことで、よりよい表現を模索するなど、児童たちが考えて伝えようとする主体的で対話的な学びにつなげることができた。

⑥ 質疑応答の概要と助言者のご助言

討論では、実際に起こっている SNS トラブルへの指導方法や、学校と家庭がどのように連携を図るかについて意見交換が行われた。ゲーム依存については、一般的に悲観的な意見が多くある中で、ゲームフィクションの考え方をどのように取り入れていくのかについて話し合いが行われた。

助言者からは、情報モラルを指導するに当たり、不正行為を追究してしまうような指導やインターネットに対するマイナスイメージを持たせる指導にならないよう気を付ける助言をいただいた。そして、コンピューターの善き担い手から社会のためにデジタル技術の活用方法を考えるデジタル・シティズンシップ教育への転換をすすめていくことを今後の指導に求めた。

実践例「一人一台端末時代の、教員と児童の Chromebook 活用事例」

実践例における「ゆたかな学び」のポイント

- ① 児童に一人一台 Chromebook を導入し、教科にとらわれることなく学校生活や授業で活用するための準備。
- ② GoogleClassroom を活用し、生徒の情報の共有、連絡をしやすいとする。
- ③ 授業、学校生活で Chromebook を効果的に活用する。
- ④ 他施設とのオンライン連携授業の実践。

- ① 児童に一人一台 Chromebook を導入し、教科にとらわれることなく学校生活や授業で活用するための準備。

生徒は、登校したらまず、充電保管庫から Chromebook を取り出し、自分の席に運ぶ。その後、用意してあるカバンに Chromebook を入れて一日過ごす。そうすることで、授業の度にいちいち保管庫へ向かう必要がなくなる。また、机の引き出しに入れてしまうと、そのほかの学習用具が入らなくなるので、横のフックにカバンをかけてそこで管理させている。授業中は、必要なタイミングで取り出し、活用している。移動教室の際は、そのカバンに教科書等を入れて運んでいる。カバンの中身には、PC だけでなく、イヤホンマイクとタッチペンを入れている。後述するが、



生徒がカバンに教科書と共に Chromebook を準備する様子

flipgrid と呼ばれる教育用 SNS（オンラインディスカッション）アプリケーションを活用する際にすぐに使用できるように、イヤホンマイクをカバンのポケットに入れていく。

- ② GoogleClassroom を活用し、生徒の情報の共有、連絡をしやすいとする。

本校は、全ての学年・クラス・教科で GoogleClassroom のクラスを作成している。生徒は、9 教科＋学級＋所属委員会で最大 11 クラスに所属することになっている。煩雑な切り替えを避けるために、仮想デスクトップの作成やタブのグループ化・ネーミング化をしている。各教科に必要なデスクトップ環境を作り、状況に応じて使い分けている。

ア 朝の活動

朝の学習の時間に、「プレイグラム タイピング」と呼ばれる、タイピング練習 WEB アプリを活用して、タイピング練習をしている。タイピングは、入力方法の基本であり、1 分間で 150 字を打つことを目標に毎日練習をしている。運指の要であるホームポジションを意識しながら練習している。

朝の活動は、タイピング練習だけでなく、自分の学級の Classroom から情報を集めます。担任の先生が事前にクラスに伝えたいことなどの朝の連絡がストリームに流れてくるので、生徒は自分の端末から確認する。そうすることで朝の ST を効率よくすすめられる。また、委員会からの連絡事項をはじめとする生徒間での情報もここで展開している。

給食委員会の活動を例に紹介する。新型コロナウイルスが流行し始めてから、給食のおかわりができなくなった。そのため、その日の朝に、給食委員の生徒から、ストリームでその日の献立と共に流れてくるフォームを活用し、ご飯の量を大盛りにするか小盛りするかを選べるようにした。

そのほかにも朝の時間は、各教科でどんなことを行うのか、その日に必要なファイルがストリームを介して流れてくるので、生徒はそれらを確認する。



朝の活動の様子

③ 授業で Chromebook を効果的に活用する。

ア 授業の板書として

理科の授業では、毎回ジャムボードを活用し、今まで黒板に記入していたことをすべてジャムボードで記入している。メリットとしては、毎回の授業が記録として残るほか、写真が貼り付けられたり、生徒と共同編集できたりすることにある。通常の授業では、生徒は閲覧権しかもっていないので、教員が記入しものを生徒は自分の端末を通して見るだけだが、権限を編集することで、指名し、記入させることができる。また、板書がデータとして残っているので、生徒が欠席した場合も容易にフォローすることができる。生徒一人ひとりに取り組みせたいような課題の際は、ジャムボードをコピーして配付することによりワークシートとして活用することもできる。配付の際に権限を変えながら配付することで、授業の効率を上げることができる。

イ スプレッドシートの活用と共同編集

理科の授業内で行った実験はすべてスプレッドシートに記録している。すべての班が同じ条件で実験を行った場合は、一カ所に実験データが集まることで、データの信憑性が増し、より科学的な根拠をもって、実験のまとめをすることができる。また、各班が異なる条件の実験を行った場合でもそれらを比較することで、条件の違いによって法則性が導けたり、条件が変わろうと、普遍的な法則を容易に見いだしたりすることができる。

ウ 動画投稿サイト（教育用 SNS「FlipGrid」）の利用

理科で実験のまとめや、現象がどういった原理で起きているのかを説明する際に、教育用 SNS の WEB サービス「FlipGrid」を活用している。教員があらかじめ用意した課題に対して、生徒は、動画や音声で投稿する。理科の授業では、科学的な現象を言葉でまとめ、説明した動画を投稿させている。生徒は音声だけでなく説明に必要な資料を作り、それらを活用して説明している。動画を投稿する際は、資料を背景にし、自分をワイプ画面で映し出し、撮影している。

エ スライド作成

理科でのまとめは、Google スライドを活用している。実験を終えた後は、他班に向けて自分たちが行った実験のまとめを発表している。実験データは、スプレッドシートで共有しているため、データを発表には用いず、結論や考察を中心に発表する。とくに、なぜそ

う言えるのか・何を根拠にそう考えたのかを中心に、実験中に撮影した写真や動画を交えてスライドを作成するよう生徒に伝えている。

④ 社会教育施設とのオンライン連携授業の実践。

昨今は、新型コロナウイルス感染症による影響で、教育の方法が大きく見直されることとなった。一斉休校・分散登校により学びの機会が失われることも多くあった。その中で、オンライン授業は物理的な制約（距離的な問題・時間的な問題）を乗り越え、簡単につながるができるので、この時代にふさわしい手段になった。

近年、オンライン授業は多様化して、リアルタイムでのオンライン授業、非同期のオンライン授業、ハイフレックス型のオンライン授業とさまざまな方法がある。それぞれの内容は下記に記す通りである。

・リアルタイムで同期するタイプのオンライン授業

普段の授業と変わらない時間帯に行い、本実践のように他施設ともリアルタイムで交流することができる授業。

・非同期型のオンライン授業

事前に動画等のコンテンツを教員があらかじめ作っておき、それを見て学習をするスタイルのオンライン授業。リアルタイムとは違い、直接のコミュニケーションは図れないが、繰り返し学習を行うことができる。

・ハイフレックス型のオンライン授業

同期型のものを同時に録画して、非同期の環境でも視聴することができるようにした授業。

今回の実践は、蒲郡市にある生命の海科学館とオンラインでつなぎ、リアルタイムで連携授業を行った。

<実践例におけるポイント>

ア 急速に進んだオンライン授業を学校の教育活動だけに活用するのはもったいない。アフターコロナでも実践できるように、学校の外とオンラインでつながる授業作りをめざす。

イ 講義を聴くだけでなく、「本物」に触れる体験をし、双方向のコミュニケーションを意識する。

ウ オンライン授業を快適に行うための環境づくり。

エ 他教科への応用や単発で終わることなく、持続していくことが可能か。

ア 2020年に突然発表された緊急事態宣言が教育のあり方を大きく変えた。初めての緊急事態宣言では、オンライン授業の実践例が多く集まることで、それを参考に実際にオンライン授業を始める学校が多く出てきた。江南市立西部中学校では、2019年に入学した生徒は、1年生の3学期に緊急事態宣言を受けた。そのため、本来受けるべき授業がすべて停止し、中学1年の理科で学ぶべき内容であった「大地の変動」の一部の単元が履修できないまま2年生へと進級することになった。履修できなかった内容に関しては、オンラインのビデオ学習とプリント学習で補うことになったが、「本物」の化石に触れたり、観察・実験を行ったりする機会を失った。そのため、科学館オンライン授業で連携すれば、短時間で内容の濃い授業ができると考えた。科学館は、科学館主催のイベントも多く実施しており、学校にはない資料も多く所有している。また、学芸員も多く在籍しているため、知識量としては学校の教員を超える専門的な知識も有している。そんな科学館とオンラインで授業をすることができれば、より効果的な授業ができると考えた。また、今回の実践は、新型コロナウイルスが収束したアフターコロナの時代でも有効な手段であると考え。社会教育施設と学校教育が連携して授業をすることで、魅力的な授業作りができるだけでない

く、卒業後の進路選択にもつながる。

イ オンライン講義は双方向のコミュニケーションがないと、リアルタイムでつなぐ意味がない。講義をただ聴くだけになってしまい、ビデオ学習と変わらなくなる。今回は、双方がコミュニケーションをとりながら、「本物」の資料を活用して実践を行った。授業のデジタル化がすすむことによって本物に触れる機会が減ってしまっただけでは、学びの質を高めることはできない。事前学習として、接続先の科学館がどんな施設で、何を行っているかなどを HP や公式 YouTube チャンネルの動画を視聴して学習した。動画には、当日の講師を務める館長が出演したものもあり、施設の活動内容を知るとともに、講師がどんな方なのかを事前を知ることができた。

今回の実践は、生命の海科学館に協力していただき、「本物」の化石が 5 種入った化石キットを一人 1 セット貸していただいた。連携授業の当日、生徒は目の前に「本物」の化石キットを置いて、画面越しに講師の話を聞いた。手元の資料を基に授業が展開され、講師の指示のもと、直接手で触ったり、化石をこすったりして「本物」を味わうことができた。講義中に疑問に感じたことは、すぐに講師の先生に聞き、その場で双方向のコミュニケーションをとることができた。触っている化石についての疑問が生じた場合は、生徒の手元を画面カメラで大きく写し、目印をつけて、講師の先生に伝えた。

ウ オンライン授業では、双方のコミュニケーションを意識して、手元の資料を中心に話をすすめるため、使用するカメラを複数台用意し、状況に応じて切り替える作業も必要になってくる。それは学校サイドだけでなく、科学館サイドも同様である。学校では、配信用



実際に化石に触る様子



活用した 2 種類の PC



生徒が質問している様子。

講師の方が生徒の質問に答えている様子。

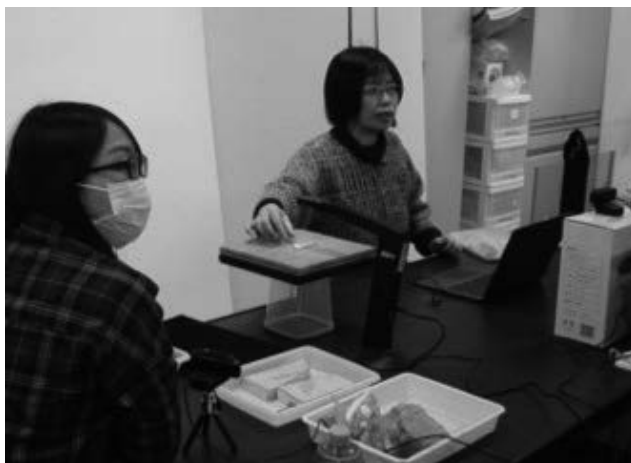
PCと資料展開用のPCを使い分け、それぞれをスクリーンで、大きく映し出し講義を聴いた。生徒の反応の様子を細かく伝えたり、質問を気軽にしやすいようにしたりするために複数のマイクも設置した。マイクは置く位置によってハウリングが起きやすくなる。そのため、今回は、ハウリングを起こしにくいスピーカーフォンを教室の前方と後方に設置した。生徒のつぶやきは着席した状態でも科学館へと伝えることができた。また、質問の際は、質問者の表情やジェスチャーなどを相手に伝えるために、マイクの前に立ち、質問者のみがカメラに映るように工夫をした。

科学館サイドでは、スライドを背景にして、ワイプ画面で、講師の先生が話をしてくださった。そのため、当日は講師・ハンドラー・アシスタントの3名体制で配信を行ってくださり、カメラの角度や背景を切り替え、臨場感が伝わりやすい工夫をしてくれた。さらに、書画カメラを活用し、生徒の手元にある資料と同じものを大きく映しながら説明するなど、生徒に分かりやすい工夫をしていた。

エ 実物に触れ、プロフェッショナルから話を聞くことで、生徒の学習意欲の向上がみられた。また、今回の実践がきっかけで、生徒の学習に対する姿勢が変わり、今まで疑問をもつことが少なく、聞いた内容を記憶することで満足をしていた生徒も、科学に興味関心、疑問をもつ姿がより多くみられるようになった。学習指導要領にも、産学連携した授業や社会教育施設との連携した授業は提唱されており、今回の理科だけでなく、社会科での工場見学のオンライン化、博物館や歴史物を多く扱う資料館との連携授業、英語科の海外の学校との連携、外国語大学との連携授業、美術科の美術館との連携授業など幅広く応用ができると考える。



学校サイドの様子



科学館サイドの様子

Ⅲ おわりに

令和元年12月。文部科学大臣メッセージとして「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育むICT環境の実現に向けて」が発表された。また同時に、文部科学大臣を本部長とする「GIGAスクール実現推進本部」が設置され、児童1人1台端末の活用が決まった。児童が端末上の情報を読み取り、学習成果を画面上でまとめることが、「令和の学びのスタンダード」になり、これまで以上に大量の情報を取り扱うことになった。また、コロナウイルス感染症対策に伴う児童生徒の「学びの保証」として、ICT活用によるオンライン学習も今後増えてくると予想される。

さらに、これと同時に、インターネットの世界は無限の広がりを見せ、最近はSNSを通じてコミュニケーションをとるおとなたちも増えてきている。おとなばかりではなく、多く

の子どもたちも SNS やオンラインゲームなどに夢中になり、情報端末と過ごす時間も増加している。このようなテクノロジーが目まぐるしく変化して、予想もできない未来でも活躍していく子どもたちを育ていく立場にあるわたしたちは、新しい時代に対応できる力を身につけさせなければならない。

本部会では、情報社会の中での子どもたちの実態を背景に、「今、子どもたちに必要な力とは何か」を明らかにしてきた。その上で教員が ICT を活用したわかりやすい授業の工夫や情報活用の実践力を育成するための学習活動、そうした活動の中での情報モラルの指導法や情報メディアを主体的、批判的に読み解く力の育成方法を追究してきた。また、プログラミング教育が実施されるに伴い、その指導方法についても研究をすすめている。

プログラミング教育では、プログラミング教材を使ってゲーム感覚で学ぶ実践や、日常生活に関連付けて、物事を順序立てて考えさせる実践等のプログラミング教育が積極的にすすめられるようになってきた。また、算数科や理科の学習において、プログラミング的思考を用いて課題解決させることで、学びが身近な生活にいかされていることに気付くことができるようにすることをめざすなど、教科の中でプログラミング的思考を育む実践も行われている。

プログラミング教育の実践については、「まずは、何をどのように教えるのか」「どんな教材があるのか」といった教員の知識不足や不安が課題として挙げられる。そのため、外部講師による校内研修や多くの実践を積み上げていくことが必要であり、単元目標を損なうことなく、教科指導とどのように関連づけてプログラミング教育を実践していくのか、授業のねらいが「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう人間性」のどれに焦点を当てて授業を構成していくのかについても考えていかなければならない。子どもたちの論理的思考力や創造性、問題解決能力を育成していくための手だてについて引き続き追究していく。

情報モラルを育成する実践については、悪意のあるメールや有害サイトなどの子どもたちをとりまく現状を正確に把握した上で、正しい活用のために情報を選択できる実践力が求められている。また、危険回避の方法を理解した上で、子どもたちが情報を有効に活用できる技能も必要である。さらに、自分や他人の写真や動画をむやみに SNS 上にアップする等、その危険性や著作権、肖像権の問題についても、学習をすすめる上で確実に理解させておかなければならない。これらに対して、地域や保護者と連携して対応していくことが喫緊の課題である。

今後、情報化社会の教育部会における、教育課程研究の成果が、各職場でいかされ、愛知の教育活動がさらに発展していくことを願ってやまない。